# 抑肝散加陳皮半夏と皮膚疾患

# 真田クリニック(神奈川県) 板倉 英俊

軟膏の選択と同様に漢方薬も皮膚の状態に応じて治療薬を選択することから、漢方薬は皮膚科の診療において親和性が高いと考えられる。漢方薬は、皮膚の状態に応じて滋潤薬、燥湿薬、清熱薬、袪風薬や熄風薬を選択するが、特に中枢性のかゆみには抑肝散加陳皮半夏などの熄風薬が用いられる。そこで本稿では、慢性痒疹およびアトピー性皮膚炎の症例に抑肝散加陳皮半夏を使用したところ、かゆみなどの皮膚症状の改善に加え、かゆみに対する執着心の緩和や睡眠不足の改善も得られた症例を経験したので報告するとともに、抑肝散加陳皮半夏の皮膚科における使用法について考察した。

## Keywords 抑肝散加陳皮半夏、かゆみ、皮疹の悪循環、執着心、睡眠

#### はじめに

皮膚科の診療に漢方薬は非常に親和性が高いと考えている。なぜなら、皮膚科の軟膏の選択と漢方薬の選択は、同様の思考パターンから導き出されるからである。例えば、皮膚を観察して触診し、乾燥・湿潤・炎症で熱が強いと皮膚の病態を判断する。そして、乾燥した肌に対しては保湿作用のあるワセリンなどを使用し、ジュクジュクした湿潤肌には亜鉛華軟膏で乾かす。もし熱が強く赤みもあるときは抗炎症作用のあるアズレンなどを使用し、かゆみには局所性止痒作用のある抗ヒスタミンの外用薬や中枢性止痒作用のある抗ヒスタミンの内服薬を選択する。現在広く使用されるステロイドは、湿潤と炎症がまじりあった皮膚の病態に使われる。漢方医学では、やはり皮膚をよく観察し、乾燥していれば滋潤薬、湿潤であれば燥湿薬、熱が

強ければ清熱薬、そして局所性のかゆみには袪風薬を使用し、中枢性のかゆみには熄風薬を使用する(図1)。袪風薬、熄風薬に含まれる「風」は、風邪(ふうじゃ)とも言い、身体に病態を引き起こす六淫の一つの風を指す。漢方医学では「痒自風来」と、かゆみは風によって引き起こされると考えてきた。この風には、外界から皮膚を刺激する外風と、体の中で発生する内風とに分けられる。この外風の治療法を袪風と呼び、内風の治療法を熄風と呼ぶ。熄風には、かゆみを抑えるだけでなく、イライラやけいれん、気血の上逆を抑える作用がある。熄風薬の「イライラ」のような精神への作用も、間接的に皮膚のかゆみを減らすことに貢献する。袪風薬の代表方剤には十味敗毒湯・消風散があり、熄風薬の代表方剤には抑肝散加陳皮半夏・加味逍遙散などがあげられる。

今回は、抑肝散加陳皮半夏の皮膚科での使用法について

#### 図1 皮膚の病態と漢方治療

	皮膚の病態	皮膚科治療		漢方治療	代表方剤
	乾燥	潤す ワセリンなど		滋潤薬	当帰飲子 四物湯 六味丸
3	湿潤	乾燥させる 亜鉛華軟膏など	乾燥させて炎症を除く ステロイド	燥湿薬	五苓散 胃苓湯 柴苓湯 猪苓湯
	熱が強い	抗炎症作用 アズレンなど		清熱薬	黄連解毒湯 温清飲 白虎加人参湯
	かゆみ	局所性止痒薬		袪風薬	十味敗毒湯 消風散
		中枢性止痒薬		熄風薬	抑肝散加陳皮半夏 加味逍遙散

述べる。抑肝散の出典は「保嬰撮要」で、「抑肝散肝経の虚熱、搐を発し、或いは発熱して咬牙し、或いは驚悸して寒熱し、或いは木、土に乗じ、而して痰涎を嘔吐し、腹脹り食少なく。睡臥安からざるを治す」とある。「浅井家腹舌秘録」には、「左の臍の辺より、心下までも動悸盛んなるは、肝木の虚に痰火甚だしき症也。北山人、常に抑肝散に陳皮・半夏を加え、験を取ること数百人に及ぶ。」とある」。これより抑肝散加陳皮半夏は抑肝散に痰飲を合併し、その腹証として臍傍動悸を触れる者に良いと考えられる。

湿疹の治療では、湿疹の名の通り、体の余計な湿を治療しなければならない。抑肝散に陳皮・半夏を加え、水液代謝を強化された抑肝散加陳皮半夏は、より湿疹の治療に向いた方剤と言える。

では、抑肝散加陳皮半夏は臨床で具体的にどのように使 われるか?

抑肝散加陳皮半夏は、かゆみのためによく眠れない、もしくはかゆみや皮疹そのものに執着があり、搔いてしまうことで二次性の湿疹を作り出して悪循環に陥るケースが 適応となる。他人からみると「そんなに神経質に搔かなければ治るのに」というときに使うのである。

### 症例1 慢性痒疹

慢性痒疹は、強い瘙痒を伴う孤立性の丘疹や小結節をい う。搔破などにより増悪し、難治性の結節を形成する。

症例は48歳の女性、主訴は慢性痒疹による全身のかゆみである。経過は、10年前からの全身のかゆみのために、他院皮膚科へ通院していた。慢性痒疹と診断され、抗アレルギー薬、ステロイド(クロベタゾールプロピオン酸エステル)の軟膏およびステロイドテープ剤を処方され、ときどきトリアムシノロンアセトニド注射を受けていたが効果がなく、かゆみのコントロールができないため、当院を受診した。

望診では、やせ型で、無数の痒疹が四肢に散在していた。追加して問診を聴取すると、ストレスが多く、かゆみのために不眠がちで、いつも四肢を搔きむしっているとのことであった。小学校二年生の双子の育児をしていて、育

児に対してもストレスをかかえていた。そして、やや便秘 気味とのことであった。脈は弦細、舌はやや紅色、薄白苔、 腹診では左の胸脇苦満を軽度に触れて、左臍傍部に動悸を 認めた(図2)。

かゆみによるストレスと子育でによるストレスが重なりあって皮膚を搔いてしまい症状が改善しないと考え、抑肝散加陳皮半夏エキス細粒7.5g/2xを処方した。なお、軟膏はそのまま継続とした。2週間後の再診のときには、かゆみに対して許容度が増え(かゆみが「許せるようになった」)、夜に眠れるようになった。また、(予想していなかったことだが)便秘も軽減した。このため、抑肝散加陳皮半夏の処方を継続した。その後、ステロイド軟膏はステロイ

図2 症例1 48歳 女性 四診

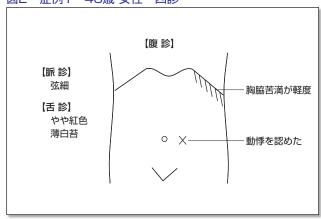


図3 症例1 48歳 女性 経過図



ドテープ(フルドロキシコルチド)の貼付のみに変更し、2ヵ月後には腕に数個の痒疹が残存するものの、それ以外の皮疹はなくなり、落ち着いた生活になった。なお、漢方薬の服用をはじめてから、ステロイド注射は一度も必要としなくなった。

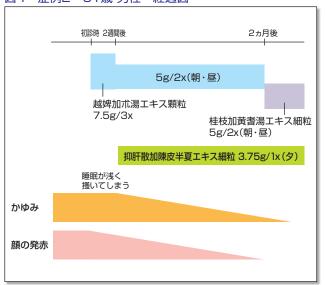
本例は、掻破つまり掻きむしることで、いつまでも治療がうまくいかず、かゆみに対して執着心が強かった症例である。抑肝散加陳皮半夏でその執着心を取ることで、治療がうまくいった症例であった(図3)。

なお、皮疹の赤みが鮮やかでかゆみが強いときは、抑肝 散加陳皮半夏のみではコントロール出来ないときがある。 そのようなときは、抑肝散加陳皮半夏に黄連解毒湯を併用 することでしばしば効果を得る。

#### 症例2 アトピー性皮膚炎

症例は31歳の男性。子供のときからのアトピー性皮膚 炎があり、全身のかゆみのために当院を受診した。皮疹の 状態は、首から上の発赤、特に髪の生え際・上眼瞼・下眼 瞼、上肢の発赤が著明で、皮膚は全体的に褐色であった。 今回は、花粉飛散の時期になってから症状が悪化した。 舌はやや紅色、薄黄苔、やや胖大、脈は弦滑、やや数で あった。花粉症の時期からの悪化とのことで、風水と考 え、越婢加朮湯エキス顆粒7.5g/3xを処方したところ、や や顔の赤みは軽減するものの、かゆみのために睡眠が浅く なり搔いてしまうとのことであった。越婢加朮湯の麻黄も 浅眠の原因ではないかと考え、処方を越婢加朮湯エキス顆粒 5g/2x(朝・昼)と抑肝散加陳皮半夏エキス細粒3.75g/1x (夕)に変更した。その結果、発赤はかなり軽減し、2ヵ月 間の内服で顔の発赤がほぼ消失したため、桂枝加黄耆湯エ キス細粒5g/2x(朝・昼)、抑肝散加陳皮半夏エキス細粒 3.75g/1x(夕)とした。現在も来院されているが、最低限 のステロイドと保湿剤でほぼコントロールできている(図 4)。夜間は、陰血を養う時間であり、陰血を養うことで 肌は滋潤されて回復することができる。肌のゴールデンタ イムといって、22時から深夜の2時にしっかり寝ることが 大事というが、漢方の時間医学の考え方にも、非常に合致

## 図4 症例2 31歳 男性 経過図



していると思われる。実際、多くの夜更かしのアトピー性皮 膚炎はなかなかよくならない。よい睡眠を得るために、生活 指導も行いつつ、抑肝散加陳皮半夏で睡眠の質を高めて、 皮膚の治る時間を確保することも、大変有効な方法と考え られた。

#### おわりに

抑肝散加陳皮半夏をうまく使うと、環境因子であるストレス、睡眠不足を改善し、搔破による皮疹の悪循環を軽減することができる。この処方だけで皮疹の治療が完成するわけではないが、漢方薬ならではの作用で、標準治療にプラスして治療の幅を広げることができる。

#### [参考文献]

1) 小山誠次: 古典に生きるエキス漢方方剤学, メディカルユーコン: 1111-1128, 2014